

音源の比較試聴(14)

—ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番—

1. 始めに

前報(13)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果をも、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のセルゲイ・ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を聴いていきます。

アナログ盤

ドイツグラモフォン MG 2197

スヴィャトスラフ・リヒテル(ピアノ)

スタニスラフ・ヴィストツキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー

LONDON SLA 1033

ウラディミール・アシュケナージ(ピアノ)

アンドレ・プレヴィン指揮ロンドン交響楽団

STAGE+

アレクシス・ワイセンベルク (ピアノ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮:ベルリンフィル

ユジャ・ワン (ピアノ)

マイケル・ティルソン・トーマス指揮ロンドン交響楽団

ブルース・リウ (ピアノ)

ジャンンドレア・ノセダ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団

ユジャ・ワン (ピアノ)

ワレリー・ゲルギエフ指揮マリインスキー劇場管弦楽団

エレヌ・グリモー (ピアノ)

クラウディオ・アバド指揮ルツェルン音楽祭管弦楽団

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログのリヒテル盤は、1959年の録音で、いささかなローレンジですが、リヒテルの力強いタッチとワルシャワ国立フィルハーモニーのメランコリックな表現が聴

きどころです。

アナログのアシュケナーズ盤は、録音年代は不明ですが、リヒテル盤よりシャープで、若いアシュケナーズの勢いのある演奏が聴けます。

STAGE+のワイセンベルクとカラヤン指揮ベルリンフィルは、STAGE+を楽しむ(105)でも報告しており、1973年の収録です。ワイセンベルクとカラヤンは一度も目を合わせませんが、曲の進行はぴったりとあっており、重量感のある演奏でメランコリックなラフマニノフの世界を形作っていきます。

STAGE+のユジャ・ワン とトーマス指揮ロンドン交響楽団は、2021年の収録です。ユジャ・ワン独特の歯切れのよいピアニズムです。

ブルース・リウ とノセダ指揮サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団は、2023年のラインガウ音楽祭での収録です。清新なラフマニノフで、いかにも現代の演奏といった感じです。

ユジャ・ワンとゲルギエフ指揮マリンスキー劇場管弦楽団は、ゲルギエフ指揮マリンスキー劇場管弦楽団の重厚な演奏に触発されてか、ユジャ・ワンも熱のこもった演奏でいつもにも増して切れのよい演奏です。なお、ユジャ・ワンのラフマニノフのアーカイブは多いのですが、上記2つに留めました。

グリモーとアバド指揮ルツェルン音楽祭管弦楽団は、2008年のルツェルン音楽祭での収録です。若いグリモーが感性豊かに抒情性を滲ませて演奏しています。

4. まとめ

いずれをとっても、アースアキュライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらにはAV ドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、収録年代や演奏の違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上